

山田清市著『伊勢物語校本と研究』

中田 武司

これまで伊勢物語における校本研究は、昭和八年に刊行された池田亀鑑博士の『伊勢物語に就きての研究』（校本篇）に負うところが多かった。しかし、この大著も今日では各種の書本の発見があつて大幅な補訂が必要である。その労多く努力の要する仕事はもはや今日では独力で行うことは不可能に近いとさえ考えられていたが、今度、山田清市氏の『伊勢物語校本と研究』が上梓されたことは斯道における慶事に値する。

「校本篇」と「研究補遺篇」の二篇を主とする本著は、まず「校本篇」が、定家本系統諸本の校異を主軸とする内容と非定家本系統の校異の双軸よりなっている。

とりわけ著者が永年博搜し、一千余の伝本を調査した結果、純度の高い伝本を鋭い眼力で選定し、系統的に分類整理された武田本本文の設定とその復元作業は幅広く彩光を放つものである。

山田氏によつて学会に広く知られるようになり、種々の原初勢語論を沸かせた、通具本の発見や紹介は、その時々学会や研究者に慈雨の如き活力を与えてきた。また、伝尊鎮親王筆本や『古典文庫』において紹介発表された伝為家筆本なども、時宜を得てす

でに著者によつて翻刻されもしたが、これらが本書では一堂に顔をあわせて収められているのも有難い。

周知のように、氏は『伊勢物語の成立と伝本の研究』を昭和四十七年に公刊されている。この前著を補い、更に密度の濃い充実の著として上梓されたのが本書といえよう。

全書にわたつて重厚な文章と、明析な分類や論展には謙恭な態度の中に随所に氏の研究者としての年輪を窺うことができる。

「校異篇」中、氏がもつとも精力的に努力しておられるのは、なんととっても「根源本系統の分類」であろう。

この分類は一昔前には一学者の分類方法でしかなかった。しかし、今日では、伊勢物語の校異を研究する者の基本的な分類として評価が定着しつつある。これを基盤として武田本の本文研究も充実し、更には天福本の意味も再認識されるようになったとさえいえる。根源本の類別も、今日伝本として溯源し得る最古の伝本（建仁二年本Ⅱ寂身本）をその根源に据えたのも妥当な分類であるといえよう。

氏の研究によつて武田本は、勢語伝本として、また勢語の文芸観の研究にもその存在の意義が高まり、また本著においては更に幅広く、勢語の成立、生成という観点と相俟つて後述の「補遺篇」において広い論展となっている。

一体に底本の決定や原本の再建は困難なものである。この難題をかかなり明確にした本著は、決して独断論ではなく、根源本一類から六類の諸本四七本の検討をはじめ、武田本系、天福本系、建仁二年本系の諸本を表に、非定家本系統の諸本、真名本系、更に

は異本としての前記通具本や阿波国文庫旧蔵本の検討が緻密になされてゐる。そして、これらの稀覯本も大島氏旧蔵の頭昭本とともに本著に翻刻されてゐる。

山田氏は『文学』誌上において、またその他の学会誌においても校異を基盤とする勢語の成立論を展開してこられた。こうした数ある論文の中で、他者の追従を許さないのは、氏の終始一貫した基礎的資料の重視と、新資料を十分検討の上でなされる歯切れのよい理論展開である。

「研究篇」に見る「伊勢物語定家本の成立」の論をはじめとして、「伝為家筆本伊勢物語」「越後本、大島本考」「古今集業平歌の詞書」などでも知れるように、伝本や資料が要領を得て生きてくる内容の論文である。更にまた成立論関係では、「伊勢物語構成論」にみるように研究者の見落しを指摘する論文が多い。

これら諸論のすべてを紹介する枚数はなく今は割愛せざるを得ないが、氏といささか意見を異にする論を成立論で展開して来た筆者も、前記諸論文の方法や論展には大いに啓発されるところが多い。

山田氏の伊勢物語研究の視点は、その文献を通した成立論の中で明らかに把握することができる。たとえば、前述の池田博士の分類以来、特異本文をもつという理由で、定家本の系列から除外していた「承久本」は、いわゆる「イ類六種」の中の一本として分類すべき定家本系の一本であることを氏は証明した。この研究によつて、従来なされた多くの成立論は再考せざるを得なくなつたし、同様に、「古本系第二類」の「伝慈鎮筆本」も定家本系の武

田本の一種であること、更に、「後醍醐天皇宸翰本」も「最福寺本」との関係で論じ、同様に「時頼本」の特異本文に論究して、これらも定家本系統下に属する「根源本第二系統の伝本」であることなどを次々と実証しておられる。これらの実証的研究は、今日学会において、もつとも注目されているところである。

伊勢物語の研究姿勢を大きく二分するとすれば、その一つは氏のような研究型であり、今一つは文芸論的な研究型であろう。この両者が相俟つて勢語研究は集大成される。この集大成は一箇人の労では到底困難な大目標である。しかしながら山田氏の研究の見極めの愷さには将来の研究者への展望的軌範をみる思いがする。

氏の「研究篇」にみる論には、時として研究者が避けて通りたような煩雑な問題が不動の問題として主題に据つてゐる。それらの問題に関して氏は正面からとりくみ、旺盛な研究心でこれを解析している。前著以来、停まることを知らず努力の累積が、今度の一書に纏つたものだが、当然のことながら、氏の研究を通過しなければ前進できなかった多くの研究者は、今後更に氏の論の上に立つて左右に自由な論展を開くことが可能である。

いうまでもなく、研究には理念が必要である。もつともその理念は想像と現実の中間において創造されるものでもある。氏の方法論にはこの理念がある。具体的には「新資料伝為家筆本伊勢物語について」や「姉小路基綱卿筆本の論」は、慎重な筆の運びの中に、また「伝為家筆本(某家蔵)」の発掘による定家本の系統づけにおいても「今日伝存する勢語の九割にのぼる百二十五段二百

九首の形態を有するのが定家の校定にかかるものであろうことの証跡を更に推進せしめる役割を、伝為家筆本が担っている」(六一四頁)と陳べる他、「定家本も建仁二年本成立ごろの段階では百二十五段二百十一首であったものが、伝為家筆本に至っては、百二十五段二百十首となり、更に次の段階では、今日見るように、百二十五段二百九首となって定着してゆく」とその経緯を考察されている。そして、これらの理念は、「定家の古今集や後撰集の校定作業にも類する経緯と軌を一にする」と、勢語の生成背景を喝破して遺漏がない。

勢語研究にとって、勅撰集や業平集はこれまた大きな問題である。これらの副次的な資料として古今集および古今集の撰者の追究、とりわけ貫之に関しては、執拗なまでの運筆が展開されている。貫之の『土左日記』の用法と勢語にみる発想の共通点で勢語をとらえるのも説得力のある穏当な好論文といえる。

また、古今集と勢語との先後問題に関しては、しばしば誌上において論を交わしたところでもあるが、氏の紳士の発言は、多くの賛同者を得ていること必定である。論争における機敏な展開をみせた繊細な神経は氏の論文にみる詞の委細な選択方法にも窺うことができよう。成立論においてもまた然りである。一般論として、物語は「短から長へ」、「小から大へ」という発達が考えられる。しかし、勢語の成立においてはこれは九割がた不可とする。従って、成立において、第一次の成立を古今集以前に把握するの論を避け、これに疑問を呈する。そして、その徴証を、古今集の詞書との関係で論じた結果、勢語中の他の歌との関係で均衡を破

る長大な内容は古今集の詞書を原形としたものであると結論されている。

この問題は今日学会では論を二分する。ここにおいても氏の論展は慎重であり、従来反対の立場にあった研究者の心をとらえて離さない。古今集や業平集との関係で勢語を論ずる氏の態度は正に水を得た魚の如く筆は冴える。殊に、業平歌から業平集にわたる論においては氏の面目躍如たる一面が精力的に展開している。業平集関係の論は、早く昭和三十九年(『文学・語学』39号)に発表された氏の「原撰業平集と古今集の詞書」に基をなすものといえるが、これらをより充実させた論が「古今集業平歌の詞書について」であり、「伊勢物語八十二段の構成をめぐって」でもある。一方、これらの諸問題を透明にして、かつ問題を編纂者の周辺にしぼった論が「伊勢物語の編纂意図について」である。

以上、本書にみる諸論は、立論者としては不動の理論であることは当然だが、氏自身ものべておられるように、「伊勢物語の成立は計量統計では検証し難い」(六九八頁)のが事実である。

勿論、古今集との関係にみる先後の成立論も、確実には「文献資料による限り」という前提を要するのである。いうまでもなく、氏はこの点を無視している訳ではない。勢語が文芸的な作品であればそれ丈に、氏の研究と別の分野を開拓する学者もまた居てよいのである。これをもって氏の研究の瑕瑾とすべきでは勿論ない。

本書を上梓した氏を知る者をして「勢語を愛し、努力する人」と異口同音に評せしめる。また本書は独立の一冊であるが、前者との関係が極めて密であること前述の通りである。顧わくば併読され、氏の理論の正鵠を読者自らが理解されることを望んでやまない。

本書の刊行を慶賀しつつ安易な論を弄する時代の風潮に活を与えられた著としてこれを評価し、氏の増々の精進を期待して舌足らずの書評を擲筆する。

(昭53・10 桜楓社刊 A5判 七五八ページ 二四、〇〇〇円)

杉崎重遠著『平安中期歌壇の研究』

村 瀬 敏 夫

終戦前、『勅撰集歌人伝の研究 王朝篇・巻一』によって、歌人伝研究の方法論に新風を吹き込まれた杉崎重遠博士が、このたび『平安中期歌壇の研究』を上梓された。氏の学風をうかがうに足る克明かつ重厚の好著であるが、以下その紹介を兼ねながら、いささか所感を述べてみたい。

本書はその「後記」によれば、かつて国学院大学へ提出された学位請求論文「王朝時代における歌壇の趨勢について——道長を中心としたる——」を母胎として、それに新資料による増補訂正を加えたものという。されば「平安中期歌壇」とはあるが、道長

時代の歌壇を中心として考察されたものであって、特にこの時代を対象とした意図は、道長時代が王朝の最も代表的な時期であることによる。

王朝歌壇の研究といえ、われわれは山口博氏や上野理氏のすぐれた業績を思い浮かべるのであるが、しかるに両氏が考察された時代は、道長時代を前後するものであったから、ここに道長時代を主対象とする本書の公刊は、大方の渴望に応えたものといえよう。なお本書にいう道長時代とは、道長が内覧の宣旨を蒙った長徳元年(九九五)から、その死の万寿四年(一〇二七)に至る三十有余年を指している。

本書の主部は五章から成っている。第一章の「時代の概観」は、歌合を中心とした当時の和歌行事を概観しながら、主論への導入の役割を果たしているが、第二章の「撰集による道長時代の歌壇の状況」では、『如意宝集』『拾遺抄』『拾遺集』『麗花集』『玄々集』『後拾遺集』などの諸撰集から、道長時代に活躍した歌人たちを抽出する。その作業は執拗と思われるくらい克明かつ周到であるが、それによって道長時代の歌人の全貌を描き出そうとしている。

第三章は「歌合による道長時代の歌壇の状況」である。ここでは秋谷朴氏の『平安朝歌合大成』にもとづいて、当時の歌合に現れた道長時代の歌人を指摘するが、さらに道長時代以前に催された貞元二年の頼忠家前歌合、以後に催された長元八年の頼通家歌合とを採り上げて、道長時代との関連を検討している。その検討の結果は、否定的なものに終るが、それによって道長時代の歌人